

千の顔をもつ伊吹弥三郎：蛇の章

WisdomMingle.com

倉田 幸暢

はじめに

本稿では、「蛇(へび)としての伊吹弥三郎(いぶきやさぶろう)」にまつわる、いろいろなお話を紹介します。昨年(2019年)の第28号では、伊吹弥三郎(鬼伊吹(おにいぶき)とも呼ばれ、酒呑童子(伊吹童子(いぶきどうじ))の父親であるとされることもある人物)と、彼が象徴する湖北地域の水利についてのお話を紹介しました。そのつづきとして、「千の顔をもつ弥三郎」というテーマで、さまざまな性質をもつ存在として語り継がれている伊吹弥三郎のお話を紹介したいとおもいます。ただ、紙面に限りがありますので、ここでは焦点をしぼって、「蛇としての伊吹弥三郎」にまつわるいろいろなお話を紹介します。(それ以外の「千の顔をもつ弥三郎」のお話は、つぎのURLでご覧いただけます。<https://wisdommingle.com/?p=30320#sennokao>)

本稿で引用している文献の引用文は、読者が読みやすくなるように、引用者が適宜、文章に手を加えています。引用文のなかの〔 〕(亀甲括弧)内の言葉は、引用者による注記です。



《千の顔をもつ弥三郎(やさぶろう)》

蛇神(へびがみ)としての伊吹弥三郎(いぶきやさぶろう)と、伊吹大明神(いぶきだいみょうじん)と、八岐の大蛇(やまたのおろち)



《伊吹弥三郎(いぶきやさぶろう)》

伊吹弥三郎(いぶきやさぶろう)は、さまざまな物語において、「蛇(へび)」としての性質をもっている人物として描かれています。そのことについて、佐竹昭広さんは、『酒呑童子異聞』という本で、つぎのように述べておられます(佐竹, 1992, pp.6-8)。(※下記の引用文のなかの、「蛇髻入苧環型(へびむこいり おだまきがた)」というのは、「苧環型(おだまきがた)」と呼ばれる種類の「蛇髻入り(へびむこいり)」(蛇との異類婚姻譚)のことです)。

伊吹の弥三郎を主人公とする求婚譚が、蛇髻入苧環型(へびむこいり おだまきがた)によって形成されているという事実は、必然的に弥三郎なる人物の蛇身的性格を暗示するものでなければならない。

それでは、なぜ弥三郎の本性を特に蛇体として、蛇髻入型の求婚譚へと仕立てることができたかと言えば、それはかれが伊吹大明神[伊吹山の神]の申し子だったからである。伊吹大明神は[中略]古くから八岐大蛇[ヤマタノオロチ]が本地であると信じられていた[中略]。伊吹明神の申し子であるということは、ゆえに八岐大蛇の申し子であるというに等しい。大酒が災いして、ついには一命を落したほどの弥三郎の酒好きは、八岐大蛇の流れをくむ身であれば、きわめて自然である。伊吹の弥三郎とは、まさしく蛇神の化現だったのである。

また、『三国伝記(さんごくでんき)』に記されている、伊吹弥三郎にまつわる記述について、「弥三郎の本性の蛇体であったことは、殺されてから身を毒蛇に変じたというくだりが証明している」と述べておられます(佐竹, 1992, p.9)。

また、お伽草子の『伊吹童子』(岩波文庫『続お伽草子』所収)では、伊吹弥三郎は、舅(しゅうと)である大野木殿(おおのぎどの)によって、酒に酔わされ、騙し討ちによって殺されてしまいます。その場面について、佐竹昭広さんは、つぎのように述べておられます(佐竹, 1992, pp.9-10)。ここにも、伊吹弥三郎をヤマタノオロチと同一視する考えがあらわれているようです。

夜もすがらさまざまに酒を強い、七つの酒甕にたたえた酒を残り少くなるまで飲みほさせたというような記述には、八岐大蛇の末裔、弥三郎を、八岐大蛇と同じく酒で謀殺してしまおうとする意図が感じられてならない。

上で紹介した引用文でも言及されていたように、伊吹大明神と、ヤマタノオロチと、伊吹弥三郎は、しばしば同一視されています。

たとえば、室町時代末期～江戸時代初期につくられた、『伊吹童子』という絵巻があります(大英博物館所蔵、Sir Augustus Wollaston Franks 旧蔵)(沢井, 1989, p.186; 辻, 1999, p.6, pp.132-168)。(※「伊吹童子」というのは、伊吹弥三郎の息子の名称です。伊吹童子は、のちに、酒呑童子と呼ばれるようになります)。その絵巻では、伊吹弥三郎は、伊吹山の地域を代々支配している家系の者だとされています。また、下記の引用文にあるように、伊吹大明神は、ヤマタノオロチが変化した存在だとされています。そして、伊吹弥三郎は、その伊吹大明神の山である伊吹山を支配する存在であることから、伊吹弥三郎とヤマタノオロチも同一視されています。(沢井, 1989, pp.189-190)

昔、出雲国(いずものくに)簸川上(ひのかわかみ)と申所(もうすところ)に、八岐大蛇(やまたのおろち)といふ大蛇ありしが、此(この)大蛇(おろち)、毎日生贄(いけにえ)とて生きる人を食(く)ひける也(なり)。また、酒を飲む事おびたし。八塩折(やしおり)の酒を八の酒槽(さかぶね)に飲みしほどに、飲み酔ひて素戔鳴尊(すさのおのみこと)に殺され侍(はべ)りき。その大蛇(おろち)変(へん)じて又(また)神となる。今の伊吹大明神これなり。されば此(この)弥三郎は伊吹大明神の御山(おやま)をつかさどる人なれば、酒を好き生物(いきもの)を好み給(たま)ふかやと、諸人(もろびと)恐れをなして旅人も道を行(ゆ)き通(かよ)はず。村々里々荒れはてたり。

丸山顕徳さんは、「伊吹弥三郎伝説の形成」という論文のなかで、伊吹山の地域につたわる民話のなかに、伊吹弥三郎の伝説と、スサノオやヤマトタケルの伝説を、混ぜ合わせたような民話があることを紹介して、つぎのように述べておられます(丸山, 1983, pp.302-303)。

この論考の始めに、民話の例として、弥三郎とスサノオ、弥三郎とヤマトタケルの話を紹介した。登場人物の時代を無視した話である。しかし、出雲におけるスサノオの大蛇退治、伊吹山におけるヤマトタケルの蛇退治の話を弥三郎退治に変容させた話であることは明白である。しかも、弥三郎はこの場合、出雲における大蛇、伊吹山における蛇の役をおわされている。この話が民間に伝えられる背後には、単なる時代錯誤の民話という以上に伊吹弥三郎を伊吹山の蛇神と重ねてとらえていなくては成り立ちえないものがあつたことを考えておかねばならないのである。

八岐の大蛇(やまたのおろち)を伊夫岐神社(いぶきじんじゃ)の祭神(さいじん)とする説について



《伊吹山(いぶきやま)の祭神(さいじん)たる八岐大蛇(やまたのおろち)の火の息吹(いぶき)から生み出される鍛鉄(たんてつ)と刀剣》

伊吹山(いぶきやま)の南西(滋賀県米原市(まいばらし)伊吹(いぶき))に鎮座する、伊夫岐神社(いぶきじんじゃ)は、伊吹山の地域を代表する神社のひとつです。その祭神(さいじん)は、諸説ありますが、ヤマタノオロチであるという説もあります。『日本の神々: 神社と聖地 第5巻』という本の「伊夫岐神社」の項目には、つぎのような記述があります(江竜, 1986, p.501)。

当社〔伊夫岐神社(いぶきじんじゃ)〕では現在、祭神を伊吹大神としているが、祭神については古来諸説がある。『帝王編年記』によって多々美比古命とする説、『日本書紀』によって八岐大蛇とする説、また素戔鳴命とする説等々である。

一方、伊夫岐神社は製鉄技術集団の祖神であったとみる説がある〔後略〕

上記の引用文でも言及されているように、伊夫岐神社の祭神が、ヤマタノオロチだとされる理由のひとつとしては、『日本書紀』で、ヤマトタケルを退散させた伊吹山の神が、大蛇だとされている

ことも影響しているようです。そのときのいきさつは、つぎのようなものでした(江竜, 1986, p.501)。

日本武(やまとたける)尊は近江の胆吹(いぶき)山〔伊吹山〕に荒らぶる神がいることを聞き、剣〔草薙の剣(くさなぎのつるぎ)〕を宮簀(みやす)姫の家に置いて歩いて行った。胆吹山に着くと山の神が大蛇になって道をふさいでいた。日本武尊は胆吹山の神そのものが蛇と化しているのを知らずに、「この大蛇はきっと荒ぶる神のお使いであろう。神そのものさえ殺すことができれば、その使者をどうして相手にする必要があるか」と言って、蛇をまたいでさらに行くと、山の神は雲を起し、氷を降らせた。峰には霧がかかり、谷は暗くなり、進むことがむずかしくなったが、無理に進もうとすると、心があせって働かなくなり、酒に酔ったようになった。そこで山の下の泉のほとりに来て、泉の水を飲んで心をとりのどした。

ちなみに、伊吹山の南東(岐阜県不破郡(ふわぐん)垂井町(たるいちょう)伊吹(いぶき))に鎮座する、伊富岐神社(いぶきじんじゃ)も、伊吹山の地域を代表する神社のひとつです。その祭神も、諸説ありますが、ヤマタノオロチであるという説もあります(太田, 1987, pp.24-25)。このことも、米原市(まいばらし)伊吹(いぶき)の伊夫岐神社(いぶきじんじゃ)の祭神が、ヤマタノオロチであることの傍証になるかもしれません。

高橋順之さんは、『伊吹山風土記』という本で、伊夫岐神社(いぶきじんじゃ)の祭神がヤマタノオロチであるという説や、伊吹山の竜神(水神)信仰について、つぎのように述べておられます(高橋, 2022, pp.60-61, p.84, p.86, p.132)。

タケルの神話は、伊吹山の神の本質が水を司(つかさど)る水神(農耕の神)であることを物語っている。のちに、伊吹山寺(いぶきさんじ)のひとつ長尾寺(ながおじ)(米原市大久保)の中世の縁起に、八大龍王(難陀竜王(なんだりゅうおう))が伊吹山頂に住むという記述がある。この他にも縁起書には水にかかわる記述が散見する。本尊の毘沙門天(びしゃもんてん)は、竜神が棲(す)む竜宮城から流れてきた浮木を刻んだものだという。〔中略〕

そして、まさに姉川が平野部に出る場所にあるのが伊夫岐(いぶき)神社(米原市伊吹)である。伊富岐大神(いぶきおおかみ)を主神として八岐大蛇(やまたのおろち)を祀る。八岐大蛇は伊吹の神の変化(へんげ)であるといい、タケル神話のヘビに結びつく。湖北を潤す大河姉川を大蛇に見立てたとき、伊夫岐神社はまさに口から水を吐く大蛇の頭の位置にある。

〔中略〕

伊夫岐神社、伊富岐神社ともに祭神に多々美比古命(たたみひこのみこと)があり、『近江国風土記』逸文にみえる伊吹山の神であり、合わせて祀られる八岐大蛇とともに鉄の神とされる。伊吹山の近江側と美濃側の山麓には、鉄にまつわる神社が鎮座しているのである。

〔中略〕

伊夫岐神社の祭神の一柱は八岐大蛇であり、ここから取水する用水は「出雲井(いずもゆ)」、向いの山は「七尾山」である。「尾山」地名は大蛇伝説を示し、出雲の八岐大蛇伝説は、野だたら製鉄で製鉄炉から流れ出した銑鉄を表すともいわれている。

伊吹山は鬼伝説の舞台であり、伝承からも製鉄遺跡の存在に迫ることができる。伊吹山麓の古代史を解明する重要な鍵を製鉄遺跡が握っていると思われる。

〔中略〕

米原市伊吹に鎮座する伊吹山信仰の里宮伊夫岐(いぶき)神社は、『延喜式神名帳(えんぎしきしんめいちょう)』(九二七年)に記載される坂田郡五座のひとつで、祭神については、出雲国簸川上八岐大蛇神霊(いずものくにひのかわかみやまたのおろちしんれい)、伊富伎大神(いぶきおおかみ)、素戔鳴尊(すさのおのみこと)(須佐之男命)、多々美比古命(たたみひこのみこと)、気吹男命(きふきおのみこと)、天之吹男命(あめのふきおのみこと)など諸説あり、明治初年には八岐大蛇神霊と定められ、昭和一八年(一九四三)、祭神を伊富岐神として伊夫岐神社と改称している。

一時期主祭神であった八岐大蛇は、日本神話に登場する伝説の生きものである。

天照大神(あまてらすおおみかみ)が伊吹山(いぶきやま)に落とした
天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)



《天照大神(あまてらすおおみかみ)が伊吹山に落としたる神剣: 天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)》

『平家物語(へいけものがたり)』や『源平盛衰記(げんぺいじょうすいき)』などにまつわる文献のひとつとして、「剣巻(つるぎのまき)」と呼ばれる種類の、名剣についての話が語られている文献があります。そうした「剣巻(つるぎのまき)」の文献のなかに、伊吹山や、伊吹大明神や、ヤマタノオロチや、スサノオや、天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)、などが登場する話があります。その話は、さきほどお話したような、伊吹弥三郎をめぐる「蛇」の話にも関連する部分があるので、参考までに紹介したいとおもいます。

『源平盛衰記(げんぺいじょうすいき)』日巻第44の、「神鏡神璽(しんじ)都入り、並びに三種の宝剣の事」という項目には、つぎのような記述があります(石黒, 2005, pp.47-48)。

〔前略〕大蛇〔八岐の大蛇(やまたのおろち)〕が腹ばいになってやって来た。尾頭ともに八つあった。背中にはさまざまな木が生え、苔むしていた。眼は日月(じつげつ)のごとくで、年々呑んだ人は、幾千万かわからない。大蛇の八つの尾、八つの頭は、八つの岡、八つの谷に広がっていた。大蛇がこの酒を見ると、八つの酒槽の中に八人の美人がいる。これを本当の人間と思い、頭を八つの槽に浸して人を呑もうと思って、その酒を飲み干した。大蛇は頭を垂れて酔い伏した。尊は佩(は)いておられる十握剣(とつかのつるぎ)を抜いて大蛇をずたずたにお斬りになった。そこで十握剣を羽々斬(はばきり)と名づける。蛇の尾は斬れず、十握剣の刃(やいば)が少し欠けた。不思議に思って尾を斬り開いてみると、一つの剣がある。光ること磨いた鏡のようである。素盞鳴尊はこれを取り上げて、「さだめてこれは神剣であろう。私の物にしてよいものではない」

と、すぐに天照大神に差し上げた。大神は大いにお喜びになられて、「私が天の岩戸に閉じ籠った時、近江の国伊吹(いぶき)が嶽〔伊吹山(いぶきやま)〕に落とした剣である」

と仰せられた。

その大蛇というのは、伊吹大明神の法体である。この剣が大蛇の尾にあった時は、常に黒雲がたなびいてあたりを覆ったので、天叢雲剣(あまのむらくものつるぎ)と名づけたのであった。

上記の引用文の内容と、おおよそ同じ内容なのですが、延慶本『平家物語』巻十一(第六本)の、「霊剣等事」という項目にも、つぎのような記述があります(吉沢, 1961, pp.890-891)。

〔前略〕此山の奥に八岐羽々と云大蛇あり、年々に人を飲親を被飲者は子悲み子を被飲者は親悲、故に村南村北に哭する音不絶、我に八人の女ありき、年々に被飲て只此女一人残れり、今又被飲なんと云て始の如く又哭、尊哀と思食て此女を我に奉らは其難を休へしと宣ければ、老翁老嫗泣々悦て手を合て尊を奉礼て彼女を尊に奉りぬ、尊乍立彼の女湯津爪櫛(ゆつのつまくし)に取なして御髪にさし給て、奇稲姫の形を作給て、鐘の装束をきせて、大蛇の栖ける岡の上に八坂と云所に立て、八船に醒■〔「酉」偏に「頁」の漢字〕を湛へて其影を酒船に移て、八の口に当て侍給に、即大蛇来れり、尾頭共に八有、眼は日月の光の如して天を耀し背には霊草異木生滋て山岳を見に似り、八の頭八の尾八の岳八の谷に這渡り、酒の香をかき酒の船に移れる影をみて、女を飲と飲程に残り少くすいほして、酔臥たり、共時尊帯給へる取柄剣を抜給て、大蛇を寸々に切給、一の尾に至て不切、剣の刃少し折たり、相構て即其尾を割て見給へは尾の中に一の剣あり、是神剣也、尊是を取て我何か私に安せむとて天照大神に、献給、天照大神是を得給て、此剣は我高天原に有し時今の近江国伊吹山の上にて落たりし剣也、是天宮(あめの宮)御宝

なりとて、豊葦原の中津国の主とて天孫を降奉給し時、此剣を御鏡に副て献り給けり、爾より以来、代々の帝の御守として大内に崇奉れたり、此剣大蛇の尾中に有ける時黒雲常に覆へり、故に天叢雲剣と名く、彼大蛇と申は今の伊吹大明神是也〔後略〕

壇ノ浦(だんのうら)の龍宮城の大蛇が取りもどした天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)



《天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)を啜(くわ)え、安徳天皇(あんとかてんのう)を抱(いだ)いた、壇ノ浦(だんのうら)の龍宮城の大蛇(龍王)》

もうひとつ、「剣巻(つるぎのまき)」関連の記述を紹介します。『源平盛衰記(げんぺいじょうすいき)』日巻第44の、「老松(おいまつ)・若松剣を尋ねる事」という項目には、つぎのような記述があります(石黒, 2005, pp.52-56)。

平家が宝剣〔天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)／草薙の剣(くさなぎのつるぎ)〕を取って、都の外へ持ち出して、准后(平時子)が持って海にお入りになったけれども、上代ならば紛失しなかったであろう、末代であることが悲しいことだ。海にもぐる海士(あま)に命じて海底を探り、泳ぎの達者な者を入れて求められたけれども、とうとう見えない。朝廷では天の神、地の神に祈り、仏教の大法秘法を行われたけれども、験(しるし)がない。後白河法皇はたいそうお嘆きになった。仏神の加護がなくては、尋ねて得ることは難しいと、賀茂大明神に七日間御参籠になった。宝剣の行方(ゆくえ)についてお祈りをなされた。七日目に夢のお告げがあった。

「宝剣の事は長門の国壇ノ浦の老松・若松という海士に命じて、お尋ねなさいませ」

と霊夢があらたかであったので、法皇は還御(かんぎょ)になり、九郎判官(ほうがん)を召されて、お夢の趣旨に任せて言い含められた。

義経は百騎の軍勢で西国へ下向、壇ノ浦でふたりの海士を召された。老松は母であり、若松は娘である。院の命令の趣(おもむき)を言い含められた。母子ともに海に入って、一日経ってふたりともに浮き上がった。若松は、
「差し障(さわ)りはありません」

と申す。老松は、

「わたしの力ではかないません。不思議な差し障りのある所があります。普通の人間が入れる所ではありません。法華經を書写して、それを身にまいて、仏神(ぶっしん)の力をもって入りましょう」

と申したので、貴い僧を集めて、法華經を書写して老松に与えた。海士は身に經を巻いて海に入って、一日一夜上がらなかった。人は皆老松は死んでしまったのだと思い、嘆いていたところに、老松は翌日の午の刻ばかり(午後十二時頃)に上がった。判官は待ち設けて詳しい事情を聞いた。老松が、

「内々に申すべきことではございません。帝の前で申し上げましょう」

と言ったので、それならばと相連れて上洛する。判官がことの次第を申し上げると、後白河院は老松を院の御所法住寺殿(六条殿か)に召された。庭上(ていじょう)に参上して、老松は、

「わたしは宝剣を尋ねようとして、竜宮城と思われる所へ入りました。そこは金銀の砂を敷き、美しい階段を渡し、二階建ての楼門を構え、さまざまな殿閣を並べていました。そのありさまは普通の人間の住まいに似ていない。心で想像することも、言葉で表現することもできない。しばらく総門(外に構えた正門)にたたずんで、『大日本国の帝王のお使いです』と申し入れますと、紅(くれない)の袴を着けた女房がふたり出て、『何事ですか』と尋ねました。『宝剣の行方をご存でしょうか』と申し入れますと、この女房達は内に入り、しばらくたって出て、『しばらくの間お待ちなさい』といってまた内へ入りました。

だいぶたって、大地が動き、氷雨(ひさめ)が降り、大風が吹いて、天がそこで晴れました。しばらくして先の女がやって来て、『こちらへ』と言う。老松は庭上に進みました。御簾(みす)をなかば上げていた。庭上より中を見ますと、長さはわからないが、臥した長さは二丈(六メートルほど)もあろうかと思われる大蛇が、剣を口にくわえ、七八歳の小児を抱き、眼は日や月のようで、口は赤くて朱(しゅ)を差したようです。舌は紅の袴を振るのに似ています。言葉を出して、

『やあ日本のお使いよ、帝にこう申し上げなさい。宝剣は必ずしも日本の帝の宝ではない。竜宮城の重宝である。自分の第二の王子は、私の不審を蒙って、海中に住むことなく、出雲の国簸川(ひのかわ)の川上で、尾と頭がともに八つある大蛇(おろち)となり、人を呑むこと毎年になんだが、素盞鳴尊はかの国の王者を憐れみ、民を大切に、かの大蛇を殺された。その後この剣を尊はお取りになって、天照大神に差し上げた。

景行天皇の御代に、日本武尊(やまとたけるのみこと)が東夷を平定された時、天照大神より斎宮(いつきのみや)をお使いとして、この剣を下してお与えになられた。私は伊吹山(いぶきやま)の裾で、臥した長さが一丈の大蛇となって、この剣を取ろうとした。けれども尊は勇猛でいらっしゃる上に、勅命によって東国に下られていたので、私を恐れることなく、飛び越えてお通りになったので、取ることができなかった。その後計略をめぐらして取ろうとしたけれども、できなかった。簸川の川上の大蛇は安徳天皇となって、源平の戦乱を起こし、剣を竜宮に取り返した。口にくわえているものはとりもおさず宝剣である。抱いている小児は先帝安徳天皇である。平家の入道太政大臣清盛公より始めて、一門の人々は皆ここにいる。見なさい』

とそばにある御簾を巻き上げると、法師を上座に据えて、気高い貴人が大勢並んで座っていらっしゃいました。

『お前に見せてよいものではない。けれどもお前が身に巻いている法華經の尊さに、經に結縁(けちえん)するために、もとの姿を変えずに会うのである。未来永劫(えいごう)この劍を日本に返すことはないであろう』

といい、大蛇ははらばいになって内にお入りになりました」

と奏上したところ、法皇を始めとして、公卿がたは皆同じく不思議なこととお思いになった。それによって、三種の神器の中で、宝劍はなくなると決定したのであった。

クサナギの劍は「草を薙(な)ぐ劍」ではなく「恐ろしい蛇(ノギ)の劍」？

さきほど、天叢雲劍(あめのむらくものつるぎ)の話が出ました。『日本書紀』では、天叢雲劍は、草薙劍(くさなぎのつるぎ)の別名であるとされています。(※草薙劍は、『古事記』では、草那藝之大刀(くさなぎのたち)(草那芸之大刀)という表記になっています)。その草薙劍についての余談なのですが、佐竹昭広さんは、『古語雑談』という本のなかで、ヤマトタケルの伝説で有名な草薙(くさなぎ)の劍(つるぎ)の名称の意味は、じつは、「草を薙(な)ぐ(切り払う)劍」という意味ではなく、「恐ろしい蛇(へび)の劍」という意味である可能性もある、ということについて、つぎのように述べておられます(佐竹, 2008)。

16 天の蛇

クサナギの劍をヤマトタケルの「草薙ぎ」伝承から独立させ、試みに別の解釈をおこなってみる。

柳田国男に「青大将の起源」と題する論文がある。この論文には全国各地の方言が蒐集援用されているが、さしあたり興味深い一例は、青大将をオーナギと称する奄美大島の方言である。オーは青、ナギは蛇を意味する。一方、日本人は大空にかかるあの虹(にじ)を「天の蛇」と見て来たこと、これも柳田氏の「虹の語音変化など」に詳しい。南の島々では今も虹のことをノギ・ノーギ・ノーギンなどと言う。つまり、オーナギのナギも、虹のノギ・ノーギも、共に蛇を指すことばだったのである。

奈良時代、『常陸風土記(ひたちふどき)』の古伝説によると、ノガ姫という名の女性がいる、小さな蛇を生んだ。毎夜ひそかに名も告げず妻問(つまど)いしてきた聾君は、あきらかに蛇神である。ノガ姫のノガは、方言ナギ・ノギなどと同系の語で、ノガ姫とは蛇姫の意だったに相違ない。

17 クソヘビ

方言に蝮(まむし)のことをクソヘビともいう。「西の端は只今知られてゐる限りでは愛知県であり、他の一端はほぼ北海に達して居る」(「青大将の起源」)。命名の心理は秋田県『鹿角(かつの)方言考』(大里武八郎著)に「之ヲ忌(い)ミ嫌フ意ニテクソヲ冠セルナリ」と説明した通りであろう。

クサナギの劍のクサナギもクソヘビと同一の命名法を踏まえ、クサは嫌悪・忌避の念をこめた「臭(くさ)」、ナギは蛇の意であったと解し得る。必ずしも蝮に限らなくてよい。猛烈な威力をもった蛇に対する人びとの畏怖・警戒の念が、クサナギ(臭蛇)という名をもたらしたと考えれば足りる。

恐ろしい蛇の意をあらわすクサナギという話が、ではなぜ劍の名として伝承されたのか。〔中略〕

〔中略〕

そもそもクサナギの剣は、スサノヲの命(みこと)がヤマタノヲロチを退治して得た名剣であった。最初から「蛇の剣」だったのである。『古事記』がその箇所です「是はクサナギの大刀也」と注記していることなどをもう一度振り返って見る必要はないか。

ちなみに、佐竹昭広さんは、『酒吞童子異聞』のなかで、伊吹弥三郎の舅(しゅうと)である大野木殿(おおのぎどの)の名前になっている、「大野木(おおのぎ)」という言葉が、大蛇を意味する言葉である可能性があることについて、つぎのように述べておられます(佐竹, 1992, pp.32-34)。(※伊吹山の南(米原市(まいばらし)内)には、大野木(おおのぎ)という地名がいまも残っています。)

〔前略〕ノーギ・ノーギリ・ノーギンは、元来は「蛇」をさすことばであったことが十分にうかがわれる。「虹」の名称としてのノギが、往古は本州中央部にも存在したと推測される場合、その語義は、「虹」であると同時に「蛇」の意をもなうものであったろうことが、かくて認められるのではなかろうか。伊吹の弥三郎が妻問いた姫君の家が、ほかならぬ大野木郷[おおのぎごう]の大野木殿[おおのぎどの]であったことは、固有名詞「大野木」[おおのぎ]が、同時に、ことばとしては「大きなノギ」、すなわち「大蛇」の意とも解しうることと、はたして完全に無関係であったか。もし関係があったと仮定すれば、「大蛇」の意をあわせ持つ「大ノギ」の姓は、八岐大蛇直系の弥三郎に関する婚姻譚の性格を暗示する隠れた指標だったことになる。

おわりに

ここまで、「蛇としての伊吹弥三郎」にまつわるお話を紹介してきました。もし、興味があれば、あなたもぜひ、伊吹山に足をはこんでみていただければとおもいます。また、もし、これ以外の「千の顔をもつ弥三郎」のお話に興味があれば、つぎのURL、またはQRコードでご覧いただけます。<https://wisdommingle.com/?p=30320#sennokao>



引用文献・参考文献

- 荒川真一 (2016)「『伊吹童子』における弥三郎と酒吞童子」, 日本大学国文学会 [編集], 『語文』 (156), 日本大学国文学会.
- 江竜喜之 (1986)「伊夫岐神社」, 谷川健一 [編集], 『日本の神々: 神社と聖地 第5巻: 山城・近江』, 白水社.
- 太田三郎 (1987)「伊富岐神社」, 谷川健一 [編集], 『日本の神々: 神社と聖地 第9巻: 美濃・飛騨・信濃』, 白水社.
- 佐竹昭広 (1992)『酒吞童子異聞 (同時代ライブラリー; 102)』, 岩波書店.
- 佐竹昭広 (2008)『古語雑談 (平凡社ライブラリー; 655)』(Kindle版), 平凡社.
- 沢井耐三 [校注] (1989)『伊吹童子』, 市古貞次 [校注 & 編集], 佐竹昭広 [校注 & 編集], 『新日本古典文学大系 54: 室町物語集 上』, 岩波書店.
- 高橋順之(高橋順之) (2022)『伊吹山風土記 (淡海文庫)』, サンライズ出版.
- 辻英子 (1999)『在外日本絵巻の研究と資料 (笠間叢書; 328)』, 笠間書院.
- 丸山顕徳 (1983)「伊吹弥三郎伝説の形成」, 和田繁二郎博士古稀記念論集刊行会 [編], 『日本文学: 伝統と近代 和田繁二郎博士古稀記念』, 和泉書院.
- 『伊吹童子』, 島津久基 [編集], 市古貞次 [校訂] (1956)『続お伽草子 (岩波文庫)』, 岩波書店.
- 延慶本『平家物語』, 吉沢義則 [校註] (1961)『平家物語: 応永書写延慶本』, 白帝社.
- 『源平盛衰記』, 石黒吉次郎 [翻訳] (2005)『完訳 源平盛衰記 8(巻43-巻48) (現代語で読む歴史文学)』, 勉誠出版.

※本稿に掲載している画像は、筆者が作成したものです。